

「阪谷の今を考える座談会」第1回 ご報告

開催日：令和3年12月9日（木） 午後7時～

場 所：阪谷公民館 2階 大広間

参加者：21名

テーマ：「さかだに瓦版 第1号」をみて

- ・率直な感想や日頃思っていることを自由に言い合おう!!



【座談会の目的やルール】

[目的]

- ◆ 阪谷地区の今について、みんなで思っていることや考えていることを自由に話し合っ、そこから地域の問題解決のヒントになるようなことがないか、阪谷の望ましい将来像とはなどについて考えましょう。
(※みなさん、地域のいろいろな団体や会で役などをされているとは思いますが、ここでは、一個人として思いや考えを言っただければと思います。)

[ルール]

- ◆ この会で結論をとることはしません。みなさんの意見は貴重なご意見として主催側で参考にさせていただきます。ですので、他者の意見に同調するのは大いにOKですが、否定することはやめましょう。

[その他]

- ◆ この会で出た意見は、貴重な意見として公開(氏名等は公開しません)することにご了承ください。

【座談会（第1回）の場に出た感想、意見など】

- ◆ 大雪の地域ではあるが、こんなところにいたくないと思ったことは一度もない。ただ、若い人に訴えることができるものは何かと言われると疑問はある。
- ◆ 学校再編での阪谷小学校の統合については、少ない人数では部活動もできないとかいろいろな問題から理屈上はやむを得ないとは思っている。ただ、子どもがいなくなるから学校がなくなる、学校がなくなると若い親御さんがその地域から出ていく、その結果また子どもが減るという流れがある。もし、コストの計算から学校の統合を言うのであればそれでは地域は守れない。子どもが不自由なく暮らせる地域が望ましい。そのあたりに行政と地域との考えに隔離した部分がないか懸念する。
 - 補足) 今年、学校再編計画（案）の地域別の説明会があり、それに参加した人は知っていると思うが、この計画は決してコスト計算が理由ではなく、そこに通う児童の教育環境を第一に考えてのものである。
- ◆ 放課後子ども教室や阪谷子育てクラブで阪谷の子と常日頃接しているが、その場では、1年から6年までが同じ部屋で助け合いながら生活しており、とてもいい雰囲気である。合併して小学校はなくなっても、阪谷の子は阪谷で育ててあげたい（生活させてあげたい）と思う。その子たちが将来、故郷として阪谷を盛り上げてくれるのではないかと思う。実際、昔面倒をみた卒業生が助けに来てくれたりしている。
- ◆ 実際、阪谷から子どもいなくなっていったら、この先何もできなくなる。観光の面など活性化して人が交流することが重要になる。まちなかでもイベント時は人がいるが、夜などになったら誰もいない。若い人の行動や考え方を知る必要がある。若者を振り向かせる魔法はないだろうか。
- ◆ 昔、六呂師にも小学校や保育園があったが、それがなくなってから、やはり若い人が減って、だんだん人が減ってきているように感じる。空き家なども増えてきている。
- ◆ 3世代家族をつくっていけないものだろうか。
- ◆ 農業をやっている。農業や農作業は好きだが、儲かりはしないのが現状である。息子に聞かれてもそのようにしか言えない。規模を大きくしようとしても一人では限界がある。ただ、今いる自分たちが前向きにならないといけないと思う。グループをつくって共同で行ったり、販路を拡大して売れる農業を考えたり、外から来た人もチャレンジができるようなチャレンジ農場ができないかなとか考えたりする。

- ◆ 阪谷の作物はおいしいとよく耳にする。それをもっと活かして魅力につなげて、子どもにも伝わるようにできないか。
- ◆ 人口や世帯が減るといろんな地域の作業ができなくなる。実際、自分の区でも春のまつりはやめたし、きっと山道整備などきつい作業からなくなっていくであろう。
- ◆ 地域の魅力は若者だけでなく、実際今いろんなことを中心でやっている年配者にも伝える必要がある。
- ◆ 昨年の大雪の時実感したが、人がいなくて、一人暮らしの高齢の方を助けてあげたいのだけど、助ける方も高齢になってきて…と追い込まれている状況がある。
- ◆ 暗い問題は多いが、気持ちを切り替えていかないといけない。雪の話があったが、雪の下の野菜栽培などそれを魅力のプラスに使うのも一つの例である。そういったことを若者が知る機会を阪谷でも考えていかないといけない。
- ◆ 県外の人に無償で住んでもらって農業とかやってもらおうとかそういう手がないか。そういう人を待っているだけじゃなくてこちらからも発信していかないといけない。いいところだと思ってもらわないと…
- ◆ 「若者が」とよく言ってしまうが、若者は仕事の現場でも覚えることや経験しなければならぬことも多く、どうしても時間の余裕がない者も多い。絶対数も少ない現状で、若者にいろいろな面であまりにもプレッシャーがかかりすぎるようなことがないような配慮も必要かと思う。
- ◆ 若い人と接点を持ち、共鳴していかないといけない。
- ◆ 米の販路を見つけていくようなことは可能なのか。昔は「土農工商」といったが今は農が踏みつけられているような気がする。農業は好きだけど食べていけないからという声を若い人から聞くことがある。
- ◆ 農業にも「商」の分野の考え方を取り入れていかないといけない。
- ◆ 自活できる農業（モデル的な農場経営）というのは大きなテーマである。

- ◆ 企業誘致から企業が進出してもらって地元を盛り上げ、地元雇用してもらおうのも重要である。仕事がないと人が出ていく。
- ◆ 六呂師の活性化で県がモンベルを巻き込んで計画を作成している新聞記事を読んだ。モンベルのような大手企業が絡んでの話は期待が持てる。観光面での雇用創出につながっていくといいなと期待する。
- ◆ 阪谷の持っている魅力ある資源の掘り起こしが必要であろう。
- ◆ 新聞等を読んでいると奥越でも勝山の報道が多く、地元の者で取り組んでいるような内容が多いと感じる。大野は報道される事柄が少ないように感じるが、これは大野人がおとなしい気質に寄っているのではと思う。発言力、発信力をつけてアピールをしていかないとと思う。
- ◆ サポート隊（お助け隊）のメンバーをしている。これは高齢者など困っている人を区民で守りあおうとするものである。立ち上げてからコロナ禍などで満足な活動が発表できていない状況であるが、また、機会があったらぜひ紹介したいと思うのでよろしく願いたい。

【参加者から後日寄せられた感想、意見】

- 阪谷小学校の子ども達は星空保護区に対して頑張っている（CM制作やライトダウンイベントの協力、壁新聞の作成など）。阪谷小学校の子ども達だけでなく阪谷全体で取り組むべきではないか。ただ、よく考えると「星空」は「南六呂師」が、「結の郷」も「蕨生」である。やはり「阪谷」全体としては現在休業中の「スターランドさかだに」ではないのかと思う（コロナ禍でそば打ち体験もひまわり畑も本来の人は集まらなかったかもしれないけれども…）。あと、星空の取り組みは範囲を生活圏にどんどん広げると、「星空＝暗闇（が必要）＝犯罪」ということも考えていかなければいけないので難しい面もあると思う。また、「七宝焼」も阪谷ならではだと思う。